

氏名	伊藤道治 いとう みち はる
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第82号
学位授与の日付	昭和48年3月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	出土資料を中心とする殷周史の研究

論文調査委員 (主査) 教授 佐伯 富 教授 佐藤 長 教授 羽田 明

論 文 内 容 の 要 旨

本論文において、著者が明らかにしようとした課題は、中国における古代王朝であった殷・周（西周）の王権の確立とその衰退がどのような過程を経過してあらわれ、それはまたどのような社会現象と対応するものであったかを明らかにすることにある。

その方法として、まず殷代については、甲骨文にあらわれる当時の宗教・祭祀をとりあげることとした。甲骨文の記載は、その大半が祖先をはじめとする祭祀に関するものであるため、零細で断片的な資料のみによって、直接的に当時の政治・社会を論ずることは、稔りの薄いものである。むしろ資料の大半を占める祭祀関係の甲骨文を検討することによって、当時の政治・社会の構造が、そこにどのように反映されているかを把握することが、もっとも基本的な研究方法である。

以上の方針にもとづいて研究を行なった結果当時殷の王朝において祭祀された自然神が、実は本来殷の王朝とは血縁を異にする族集団の祭る神であり、殷が勢力を拡大するにつれて、傘下におさめた異族との紐帯として、殷の王朝において祭祀されるようになったことが明らかになった。後半期の甲骨文によると、この本来異族神であった自然神をも、殷の王系に加上しようとする態度さえあらわれてきている。また殷王朝において卜占を担当した貞人が、実は諸異族から殷王朝に派遣されたものであり、殷王がその貞人集団の長として、卜占を主宰していたことも、殷王朝の権威を高め、異族を支配するために、宗教的な事象が重要な機能を果たしていたことを示すものであることが明らかになった。しかも、王の交替によって、貞人集団の構成員に大きな変化が見られることは、権力を握った王を支持する異族の構成に変化があったことを示すものであり、このことは殷王朝の構成基盤に脆弱な一面があったことを示すものであったのである。

第二に、特に重要な点として以下のことが明らかになった。即ち祖先とくに先王の神格化がすすむに対応して、王権が強固になってくると、及びその背後に、殷の王朝を構成する血族集団が、民族制から大家族制へと変化したという社会上の変動があったということである。さらに最も重視されていた祖先祭祀

の規則が、王位の兄弟相続を契機として変更されていたという事実は、この王朝を構成する血族集団が、宗教・祭祀においても異なる習慣をもった複数の集団であったことを示すものである。この点も、王権の脆弱な一面であり、第一点と相乗されて、当時の王朝の構成を複雑なものとし、弱体化させる要因となった。最も国力の充実していた紂王（帝辛）時代に殷が急速に崩壊した理由もここにあった。

ところで、殷周時代の国家の構成は、一都市一国家というギリシア的な古代都市国家ではなく、多数の聚落——都市と農耕村落とをふくむ——から成り立っていたことが、甲骨文・金文中に使用される「邑」という文字の内容を検討することによって、明らかにすることができた。多くの聚落をピラミッド型に積み重ねて支配しようとしたものが、国家であった。このことは、殷が勢力を拡大する過程で、勢力下に入った地方の邑で祭られる異族神＝自然神を祭祀の対象とするようになった事実とも対応するものであった。周が殷を倒したあと、東方支配のために行なったといわれる「封建制度」という支配機構も、この国家構成の原理を基本とするものであった。

この周、とくに西周時代の資料は、甲骨文にかわるものとして、金文がその中心になる。しかもその内容は、周王による臣下に対する恩賞或いは叙任・冊封の記録が主であるだけに、殷代に比して、より直接的に王権の消長をたどることができる。それによると、周王の権力は、前期・中期にその極盛期をむかえ、後期に入ると、衰退にむかっていたことが明らかになった。したがって、殷周を通じて、支配者としての王の権力は、次第に強化される方向に進み、西周の前期・中期に頂点に達したことがわかる。その背後には、やはり氏族制の崩壊、大家族制の成立という社会的な変化が共通してみられるのであり、地方的な政権を握る大小の族長たちの頂点に王が存在したのである。周王はこれら族長たちに対する任命権・監督権を掌握することによって、「封建制度」を実施したのである。

この「封建制度」は、従来伝承として知られるのみで、あまり明らかではなかったが、新しい金文資料の出土、その研究成果をもととする古典の新しい解釈によって、これは、西周勢力が東方に進出していく過程で行なわれた支配の方式であり、かなりの程度実行されたものであることを明らかにすることができた。しかも、その諸侯国の構成は、都市貴族が多数の農耕村落を支配するという、殷以来の原理を受けつぐものであり、決して別個の構成原理によるものではなかった。ただ従来は地方貴族と王とが連合という比較的ゆるい結びつきをしていたのに対して、地方貴族に対する王の任命権・監督権を明確にしたものがこの制度であったのであり、これは殷の後半から次第に強化される方向に進んだ王権が、より確固としたものになることと対応するものであった。むしろそれを意図してとられた方式であったのである。そして、これを可能にしたのは、西周王朝を構成した多数の血族集団の東方・南方への進出によって、新しい支配地の獲得が容易であったこと、さらにこれが軍事行動として行なわれたために、王による統制が比較的強力に行ない得たことによるものである。しかもこの進出は、西方の周というものの東進ということではなく、考古学的な資料によれば、殷以来黄河流域において発展した古代文明の地方への拡大であり、またこの文明を創造した中原社会の膨張として、殷から西周にかけて一貫して進行した運動として理解されるべきものであったのである。

したがって、西周後期における、周王権の衰退、「封建制度」の崩壊、それにかわるものとしての租税徴収権や住民の使用権の委任といったことは、中原社会の衰弱、進出の停止、新しい土地の入手難という

全般的な歴史の流れとも対応しているものであったのである。そして、この時期になると、従来単一血族集団によって構成されていたと考えられる農耕村落に分解が生じはじめ、村落が血縁社会から地縁社会へと変化する傾向が明らかになる。これはつぎの東周時代の社会の萌芽といえよう。

かつて、王国維は殷周間における制度の変革を強調し、傅斯年は東西二文化の対立を説いた。これに対して、やや遅れて胡厚宣らは単純な殷周間の連続論を提出した。また郭沫若らによって、階級的視点よりする安易な社会構造論が行なわれてきた。これらは、それぞれの研究段階において、それなりの意義をもっていた。しかし、甲骨文・金文の研究が進み、一方考古学者による発掘調査が大規模に行なわれている現在では、それらの問題提起は再検討されねばならない。殷・西周という時代は、黄河流域の古代文明の発展と衰退という一貫した流れとして把握されるべきものであり、その間にあらわれた変化を正確にあとづけることが、先ずなされるべきことであった。それを見失なった社会構造論は空疎な論議に終るであろう。

論文審査の結果の要旨

本論文は、著者が中国古代における殷・周王朝の王権発展の経過を、主として甲骨文・金文の解明によって追究したものである。

まず著者は資料の大半を占める祭祀関係の甲骨文を検討し、殷代の政治・社会の構造が、いかに祭祀に反映されていたかを究め、これによって王権発展の跡を考察しようとする。著者によれば、殷王朝において祭祀された神には祖先神と自然神とがある。祖先神とはいうまでもなく先祖の霊であり、これが次第に神格化するにつれて祖先祭祀が確立した。またこれと併行して王位の父子相続が確立し、殷王の家長としての権威が加わり王権が強化された。自然神とは殷王朝と血縁を異にする族集団の祭っていた神である。この神が殷の勢力拡大に伴って、その勢力下に入った族集団を殷に精神的に結びつける紐帯として殷王朝において祭祀され、後には殷王系の祖先神に加上されたという。

なお著者は殷の勢力増大、つまり王権の発展を二つの方面から考察している。一つは卜占を掌った貞人の問題である。殷代には諸異族から貞人が殷王のもとに遣わされ、殷王がこれら貞人集団の長として卜占を主宰したことは、殷王朝の権威を高め王権の伸張に役立ったという。他は社会制度の変遷の問題である。殷王朝では祖先とくに先王の神格化が進むに対応して王権が強化されるが、その背後には殷王朝を構成する血族集団が氏族制から大家族制へと変化するという社会制度上の変動があったことを著者は推定する。このように祭祀の変遷を通して殷代王権の発展を明らかにしたのは、著者の新しい見解である。

次に著者は、西周の王権発展の跡を、主として金文を利用して封建制・宗法制から考察する。著者によれば殷周の国家には、その根底に邑（都市と農耕村落を含む聚落、始めは主として一血族よりなる。）なるものがある。殷王朝と邑との関係は、殷王がこれら諸邑の連合体の首長といったもので、殷王の権限は次第に強化されつつあったとはいえ、なお未ださして強大なものではなかった。それは王位の兄弟相続によって祖先祭祀の規則が変更され、あるいは貞人集団の構成が王の交代によって変化する所に見られるが、かかる現象は、王を支持する血族集団が未だ必ずしも王の支配下に統一されていなかったことを示すもので、ここに殷王朝の脆弱な点があったとする。

ところが西周の封建制は、著者によれば、殷王朝の脆弱性を補強するために実施されたという。西周は殷を滅ぼすと、東方並びに南方に進出するが、占領地の邑には同姓あるいは有功の異姓の諸侯を封建し、その任命権・監督権を周王が掌握し、また宗法制を制定して周王と諸侯との結びつきを強化しようとした。ここから周王の権限は殷王に比べてかなり強大なものとなり、西周は前期・中期にその極盛に達したという。この封建制については、従来疑問視されていたが、著者は金文の解明と考古学的発掘の成果とをふまえて、その実在を論証した。そして、この封建制は西周の東方並びに南方に進出して行く過程で行われた支配方式であるとし、その意義をも明らかにしたことは、著者の功績と認むべきであろう。

なお著者は西周後期における西周封建制の崩壊すなわち王権の衰微にも言及し、その原因として諸侯の抬頭による土地の兼併、邑人の逃亡、あるいは封土の欠乏から周王がその直轄地の管理使用権を王臣に委任したこと等をあげているのは妥当な見解であろう。

なお本論文には参考論文十二篇を添えるが、いずれも本論の行論を補強するものである。

以上の如く、著者は読解の極めて困難な甲骨文・金文を利用して、中国古代における王権発展に焦点をあてて、中国古代社会を解明しようとし、略々その目的を達したものと思われる。しかしなお古代社会の研究には資料の不足、難解等から究明さるべくして残された問題がないわけではない。例えば、帝と称する最高神が殷の祖先神・王権の発達といかに関係していたかは明らかでないが、これ等のことが明らかになれば、王権発展の跡はさらに明瞭になるものと思われる。将来、著者の研究を期待したい。しかし、これによって本論文の価値がいささかも減ずるものではない。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。